



# 町民文芸

## 只見短歌会

九月詠草

大塚栄一

指導

汗流し草取り終へてもろこしと瓜とトマトの昼餉食みをり

小倉キミ子

吾亦紅豊かに活けて十五夜の供へを夫は早々と終ふ

古川 英子

作り手の労苦を思ひ眺め行く秋の稔りにコスモスそよぐ

関谷登美子

家出でし孫如何にして過ごせるや電話のくるを恐るごと待つ

馬場 八智

外泊の父の靴下脱がせれば浮腫みし脛にゴム跡残る

新国由紀子

大型の台風逸れるを願ひつつ倒伏案じ稔り田巡る

渡部ゆき子

幼孫裸足で兄を追ひかける笑顔を見れば何も言はれず

目黒 富子

千年の時経ると言ふ大銀杏新宮の庭の黄に目を見張る

五十嵐夏美

天候を心配しつつの稲刈りに夫は予報を聞きて準備す

渡部ヨリ子

耳遠くなりたるわれかちぐはぐな返答に子は労り笑ふ

新国 洋子

(出詠順)

## 只見俳句会

十月例会

目黒十一

指導

山稜の影を重たく秋の暮

笑 羊

秋の蝶入る窓開き農具小屋

月見草列車通らぬ只見線  
初もみじ孫の寝顔の宮参り

信

紅葉山無限につづく只見ダム  
秋日和終日ひびく機械音

リウコ

エプロンの揃いの姿敬老日  
高校生の仮装行列やんま飛ぶ

邦 男

上下して行き交う雲や秋の天  
朝寒や布団蹴とばす子等にか

都

産土の神へ実りの秋祭  
独り者蠅も昼飼の相手とし

又壺歩

溝蕎麦やあなおそろしき深みあり  
沢ぐみよ渋さの後の無口なる

洋 子

休耕の二年目背高泡立草  
二人居に陰膳ひとつ九日餅

恒 夫

名月や障子に揺れるグリーンカーテン  
仲秋や雲ひとつなき月仰ぐ

一 穂

我が里は野山の錦如くは無し  
子供らの帰れば釣瓶落しかな

吉 児

記憶追う色なき風を追うごとく  
釣り場へとけものみちめく芒原

礼

桃吹くや上海戦を思い出す  
爽やかに東京五輪決定す

邦 夫